



金沢教区・金沢別院・鶴来別院 新年互礼会

を頂き、会が始まった。昨年より多くの方の参加をいただき、住職のみならず、若院や坊守、門徒の参加も多く、テーブルを移動して歓談するなど交流を深め合い、笑顔溢れる会となった。

最後に、山本外雄教区門徒会長よりお開きの挨拶をいただき閉会した。

新教区準備委員会 開催 教区改編の進捗状況 について

1月16日に金沢別院講堂において第5回「能登教区・金沢教区新教区準備委員会」が開催され、両教区の僧侶・門徒28名の委員が出席した。

本委員会では、能登教区との合併（2028年7月・新教区発足）に向けた諸課題について、組織・財務・教化・将来構想の分野別に各小委員会を設定して協議を継続してきた。

今回は、全体会ということで各小委員会の進捗状況について報告があり、諸課題が共有された。組織面では新教区の教務所事務、財務面では宗派経常費御依頼割当、教化面では教化体制、将来構想の面では両教区の現状と今後の展望がそれぞれ述べられた。

さる1月20日、金沢教区と金沢別院・鶴来別院合同の「新年互礼会」がANAクラウンプラザホテル金沢において開催された。教区内の僧侶・門徒と職員、総勢66名が出席した。

井上朋裕氏（第七組 光徳寺）司会のもと終始和やかな雰囲気

で営まれた。初めに、高乗敬和教務所長（金沢別院輪番）が年頭の挨拶に立ち、教区改編についても述べた。続いて坂本学教区会議長（第六組 等雲寺）より乾杯の発声



新教区準備委員会の様子

また、特に能登教区から心配の聲が上がっていた、引越しの後、地元の寺院とのご縁が離れてしまう、いわゆる「離郷門徒」への対応について、すでに現在金沢教区で取り組まれている「転居門徒に必ず所属寺院への連絡を促す」というはたらきかけの周知を両教区で強化する方針で一致した。具体策として、転居門徒向けリーフレット『ご門徒の皆さまへー郷里のお寺とのご縁をつなぐー』を発刊し、県内葬儀社等にもリーフレットを配置し、協力を依頼していくことを確認した。

新教区発足に向けて着実な準備が進んでおり、今後も協議を重ね、合併前でも共同でできる事業は鋭意行っていくことを申し合わせ散会した。

「ハンセン病問題」 現地学習報告会 ―栗生楽泉園を訪問して―

さる1月27日、「金沢教区解放運動推進委員会」が主催し、2025年6月に訪問した群馬県草津町の国立ハンセン病療養所「栗生楽泉園」での現地学習を受けて、金沢真宗会館ホールで報告学習会が開催された。

講師の朝比奈高昭氏（群馬県高崎市 専精寺）にWebで参加いただき、栗生楽泉園に住む、「栗生崇信会」の田中光憲氏との対話の動画を視聴し、栗生楽泉園成立以前の草津温泉の歴史や、湯治場として多くの病者が集まっていた経緯を知ることができた。

6月に訪問した委員は、重監房跡地を見学し、「自分はいれられる側か、入れる側か」という問いを突きつけられたと語った。それは、「理解者」「支援者」という安全な立場にいた自分自身が揺さぶられる体験だったという。

私にとって、もう一つの課題は「菊池事件」である。これは、1950年代に熊本県で起きた事件で、ハンセン病の元患者が殺人の罪に問われたが、偏見と差別の中で十分な弁護や審理がなされなまま死刑判決を受け、後に冤罪の可能性が強く指摘されているものである。人間として裁かれる



ハンセン病問題学習会の様子(金沢真宗会館ホール)

ことすら許されなかった現実があった。再審請求が行われたが棄却されたことを知り、問題がいままも終わっていないことを痛感した。

差別の構造は、形を変えながら、いままも社会の中に生きている。教区として現地訪問の機会を続けることには、大きな意味があると思う。ハンセン病や感染症への「差別問題」がいつか自身の話にならないように、学べる場として、ご一緒していただける方が増えることを望むばかりだ。

長井誓子（第九河北組 智證寺）

